

Ⅲ-1

モノから日本の近代生活を探る

—階層・ライフスタイル—

櫻井 準也

はじめに

モノすなわち物質資料を研究対象とすることによって、過去の暮らしを復元することができる。例えば、わが国では近世や近代におけるモノ（道具）の所有状況を探る試みとして、歴史学や民俗学などの分野で財産目録や家計簿などの文献史料の調査や雑誌記事に掲載された台所道具や家具等のリストを分析した研究事例がある。家財道具のリストと数量が示されている農家の財産目録（香月 1986）や農業団体による家財道具調査結果（津田 2003）、さらには『家庭之友』や『婦人之友』といった当時の婦人雑誌に記載された家財道具等のリストの分析（小泉 1995）などである。これに対し、文献史料を利用するのではなく、フィールド調査を実施してその当時の人々の生活実態を客観的に把握しようとした試みもみられる。その代表的な調査が大正末期から昭和初期にかけて今和次郎らによって実施された考現学調査の中の「個人所有全品調査」（今・吉田 1930）である。その後、今らが行ったフィールド調査は継続されることはなかったが、1970 年代以降になると栗田靖之（栗田 1977・1978）、正田正博（正田 1986）、真島俊一（真島 1986）、倉石忠彦（倉石 1990）などによって、アパート、農家、団地などにおけるモノ（生活財）の調査が実施された。また、博物館が実施した生活財に関する調査事例として、神奈川県相模原市上九沢の農家の生活財の調査事例がある（相模原市立博物館 1997）。

1 方法としての近現代考古学

こうしたなかで、発掘調査という独自の方法を用いて出土した近現代遺物を分析することにより、近現代の日常生活を復元したり、遺跡の性格によって異なる遺物の特性を浮き彫りにするのが近現代考古学である。近現代遺跡の発掘調査は 1970 年代になって一部の遺跡で実施されるようになり、1980 年代後半以降になると発掘調査事例が増えてきた。その後 2000 年以降になると近現代遺跡の発掘調査例は減少しているが、その背景に 1998 年の文化庁通達の影響がある。文化庁は埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲として、近現代の遺跡については「地域において特に重要なものを対象とすることができる」としているため、近現代遺跡が地域の歴史を特徴づける存在である一部の市町村や学術調査を除くと近現代遺跡が調査され報告されることはなくなってきているというのが現状である（桜井 2007）。

この状況を打開してゆくためには、近現代考古学の学問的意義の提示、目的意識をもった調査・研究が必要である。かつて筆者は、生活史研究としての近現代考古学に期待される成果として、①文献記録の乏しい地域あるいは記録を残さなかった階層の人々の生活を発掘資料を用いて復元すること、②発掘された遺物群やその組み合わせ（アセンブリッジ）の変化から、その地域や特定集団の生活様式の変化（近代化や西洋化）の様子を読み取ること、③遺物の廃棄行動やライフサイクル、使用痕の分析などから過去の人間行動の復元を試み、人とモノとの関係を明らかにすること、④学際的な研究に心がけることにより、他分野や一般社会に対して考古学の存在とその有効性を訴えることをあげた（桜井 2004）。このように、近現代考古学が戦争遺跡など特定のテーマに特化した分野ではなく生活史の立場から日本の

近現代生活について検討する分野であることを認識することや人文・社会科学の諸分野との関係の中で人とモノとの関係を探る「物質文化研究」として近現代考古学を位置づけようとする方向性（メタ・アーケオロジー研究会 2005）は重要である。また、同時に考古学独自の方法を駆使した研究を実践することも必要である。例えば、食器の表面に残された使用痕は過去の人々の日常的行為がそのまま記録されたものであり、実体顕微鏡を用いて観察・分析する使用痕研究は当時の食事の動作や作法を復元する研究として位置づけられる（桜井 2005）。

2 出土したモノ（生活財）から近代生活を探る

ガラス瓶組成と遺跡の性格

次に、実際に近代遺跡から発掘されたモノ（生活財）の組成（アセンブリッジ）は遺跡の性格をどのように反映するかという問題について、東京周辺の近代遺跡から発掘されたガラス瓶を用いて検討してみたい（桜井 2006）。ここでは新橋停車場（新橋駅）の跡地にあたる東京都港区汐留遺跡（汐留地区遺跡調査会 1996、東京都埋蔵文化財センター 1997、2000、2003）、陸軍輜重兵学校跡地にあたる東京都目黒区大橋遺跡（目黒区大橋遺跡調査団 1998）、結核治療専門の東京市療養所跡地にあたる東京都中野区江古田遺跡（旧国立療養所中野病院跡地遺跡調査会 1999）、海浜別荘地にあたる神奈川県葉山町No.2 遺跡（葉山町No.2 遺跡発掘調査団 1999）、東京郊外の農家跡である東京都日野市南広間地遺跡（日野市遺跡調査会 2003）について検討する（図 1）。

これらのガラス瓶組成について検討すると、旧新橋駅の駅舎と多くの鉄道関連施設が存在した汐留遺跡のガラス瓶組成では、ワイン瓶、薬瓶、インク瓶の割合が高いことがわかる。このうち、ワイン瓶をはじめジン瓶、洋酒瓶については構内に外国人技師が居住していたことがその理由としてあげられ、インク瓶は駅舎や事務室において行われる様々な事務処理で使用されたものと推定される。また、静岡や横浜の牧場名の陽刻のある資料が出土している牛乳瓶やガラス製茶瓶（汽車土瓶）の出土は駅舎という性格を反映している。陸軍輜重兵学校があった大橋遺跡についても薬瓶の割合が全体の3〜4割を占めているが、このことは調査地点が医務室周辺であったことと関連しており、事務室で使用されたインク瓶の種類と量が多いことも特徴的である。また、化粧瓶の出土も多いがその多くが男性用整髪料瓶やポマード瓶である。結核療養所跡にあたる江古田遺跡については、薬瓶が全体の約4割を占めており、一般用薬瓶が少なく薬品瓶が多いことや療養所の医療用薬瓶が出土していること、サイダー瓶や濃縮清涼飲料水瓶が多く出土していることは療養所の特徴を良く示している。また、他の遺跡では出土していない肉汁瓶が出土しているが、肉汁は当時結核に効くとされ飲用されていた。昭和前期から戦中にかけての海浜別荘であった葉山町No.2 遺跡から出土したガラス瓶については、薬瓶がほぼ半数を占めているということやビール瓶や清涼飲料水瓶などが一定量含まれていることが保養地や療養地としての海浜別荘地の特徴を示している。これに対し、都市近郊の農家跡である南広間地遺跡では、酒瓶、清涼飲料瓶、薬瓶の割合が少なく、化粧瓶（特に女性用の化粧クリーム瓶）の割合が高いことがわかる。また、他の遺跡と比較してガラス瓶の種類が多く、染料瓶など日常生活に使用される瓶が多く出土しており、近代の都市近郊農村における家庭生活を反映した内容となっている。このように、近代遺跡から出土した生活財の一つであるガラス瓶の組成（アセンブリッジ）はそれが購入され消費される「場」の特徴を反映していることがわかる。

近代化とモノ（生活財）の変化

これに対し、近代遺跡の層位発掘によって近代社会の暮らしぶりの変化を探ることも可能である。平成14年（2002）および平成15年（2003）に発掘調査が行われた神奈川県三浦市ヤキバの塚遺跡からは明治時代から戦後にかけて廃棄された大量の生活財が出土し、都市近郊村落の暮らしぶりを探る貴重な

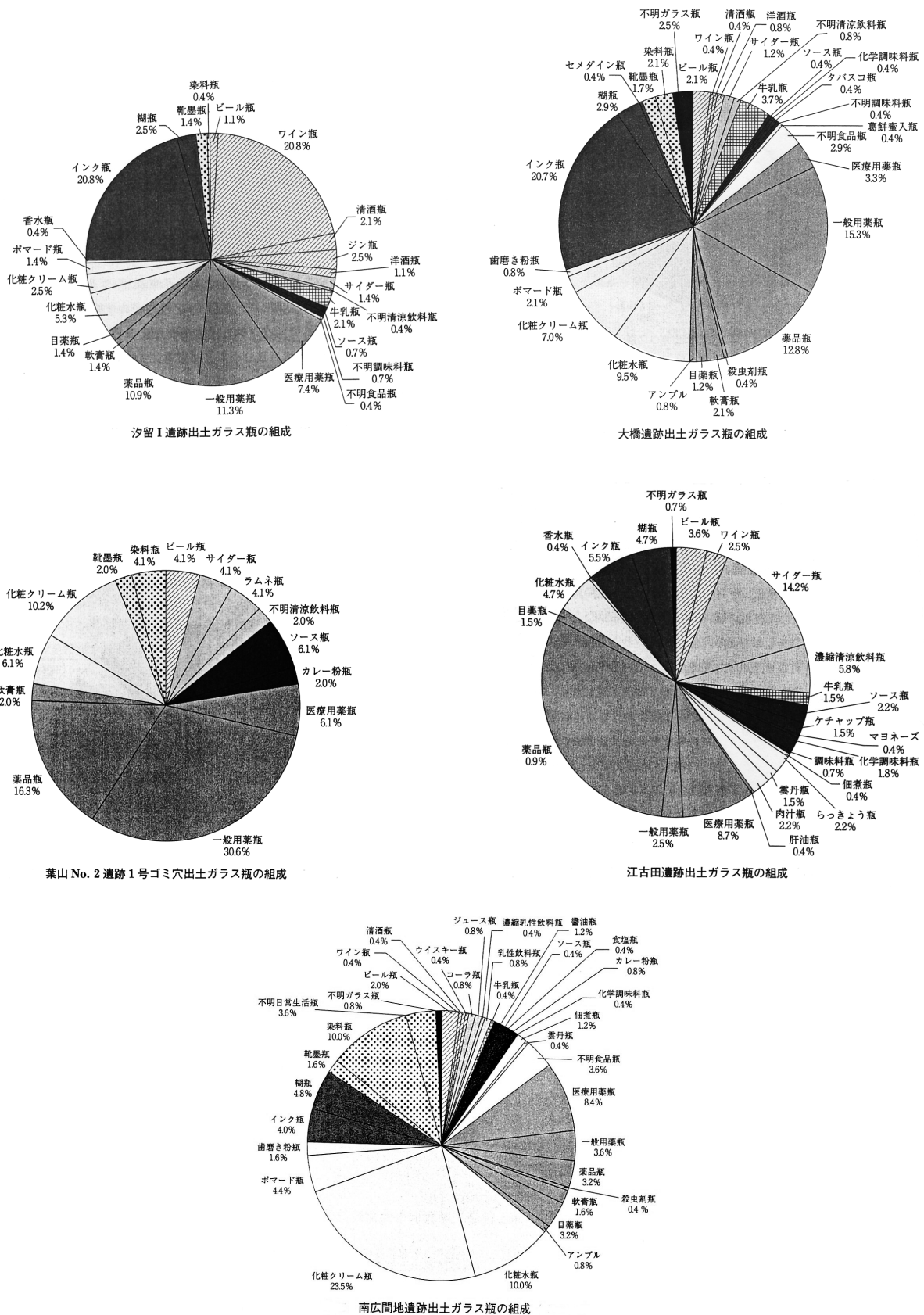


図1 近代遺跡出土のガラス瓶組成

表1 ヤキバの塚遺跡の層位別出土遺物

層位	時期	磁器絵付	近世陶磁器	洋食器	明かり	化粧	子ども
表土	戦中～昭和30年代	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵、ゴム版絵付、朱点文、スクリーン転写		○	ランプ、火屋、電球、電燈、碁子	化粧水、化粧クリーム瓶、化粧油瓶	子ども茶碗、人形、プラスチック製玩具、ビー玉、おはじき、ファミコンカセット
1層	戦中	手描き、色絵、型紙摺り、銅版転写、ゴム版絵付			火屋、電球、電池	化粧水、化粧クリーム瓶	子ども茶碗、ニッキ水瓶、鉄製玩具、ビー玉、おはじき、石蔵り玉
2層	昭和前期	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵、ゴム版絵付	○		ランプ、火屋、電球、碁子、笠	化粧クリーム瓶、簪	子ども茶碗、ニッキ水瓶、ビー玉、おはじき
3a・b層	大正末～昭和初期	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵、ゴム版絵付	○		火屋、碁子、電燈笠	化粧水瓶	子ども茶碗、ニッキ水瓶、ビー玉、おはじき
3c層	大正後期	銅版転写			灯明皿、ランプ、火屋、笠		ニッキ水瓶、おはじき
4層	明治末～大正	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵	○		乗燭、灯明受皿、灯明皿、脚付灯明皿、火屋、笠	鉄漿壺、油壺、化粧水瓶、櫛	おはじき
5層・土坑1	明治30～40年代	手描き、型紙摺り、銅版転写	○		脚付灯明皿、火屋、笠	油壺	子ども茶碗、おはじき、石蔵り玉
6層	明治30～40年代	手描き、型紙摺り	○		火屋、笠		おはじき
7層	明治20～30年代	手描き、型紙摺り、銅版転写	○		灯明皿、脚付灯明皿、火屋、笠		
8層	明治20～30年代	手描き			火屋	鉄漿環	
土坑2・3	明治20～30年代	手描き、型紙摺り	○		灯明皿	鉄漿環	
9層	明治10年代	手描き、型紙摺り	◎		火屋		

資料となっている（三浦の塚研究会2003）。塚の規模は現状で東西方向約20m、南北方向約15m、高さは2.5mに及び、塚からは周辺の海で採れた多量の貝類に混じって、陶磁器やガラス製品などの生活財、釣針・土錘・蛸壺などの漁具が多数出土している。各層位の形成年代は最下層の9層が明治10年代頃、6～8層が明治20～30年代頃、5層が明治30～40年代頃、4層が明治末から大正頃、3層が大正から昭和初期頃、2層が昭和初期頃、1層が戦中前後、表土層が戦中～戦後と推定されている。発掘調査は層位ごとに実施しているため、陶磁器など近代遺物の編年研究に大いに貢献することが期待されるが、それ以外にも村落の近代化の様子を発掘された生活財を通じて明らかにすることができた（表1）。具体的には、明治時代から戦後

にいたる「明かりの道具」や「化粧の道具」の変遷である。まず、「明かりの道具」については江戸時代以来の行灯などに使用される乗燭や灯明皿が大正頃の層まで出土し、それに代わって電灯の笠や電球、碁子などが出土するようになっている。また、ランプの部品や火屋は明治10年代から戦中頃にかけての層から出土しており、電気の時代になってもランプが納屋や土蔵などで使用されたり、保管されていたことが窺える。これに対し「化粧の道具」は、お歯黒道具である鉄漿壺や鉄漿環、また日本髪には欠かせない油壺が明治末から大正頃の層まで出土しており、大正の頃にはお歯黒の風習がなくなり、そこ頃から日本髪を結う女性が少なくなってきたことが想像できる。このように、この地域において近世的生活スタイルが近代的生活スタイルへと変化した時期が大正頃であることが、出土したモノ（生活財）の変化から読み取ることができる。

3 階層からライフスタイルへ

モノをめぐる消費理論の展開

近代社会について考えるうえで重要な研究課題としてモノ（商品）の消費活動に関する研究があげられる。その中でも階級や階層、あるいは個人のライフスタイルによる消費選択のあり方の違いは興味ある研究テーマの一つである。例えば、ダグラスとイシャーウッドは支出慣習によって社会階級が規定され、職業と所得のグループ分けが可能になると述べるとともに、商品の普及には一定の法則がみられると指摘している（ダグラス and イシャーウッド1984）。また、ブルデューは、文化に関わる有形・無形の所有物を「文化資本」と定義したうえで、文化的財の消費選択を通して社会的階級の趣味（嗜好や美的価値）が生産されることを「文化的卓越化」と表現し、これによってライフスタイルが生成されると論じた（ブルデュー1990）。ラントとリビングストーンもライフコースの段階と個人の社会的な要求によ

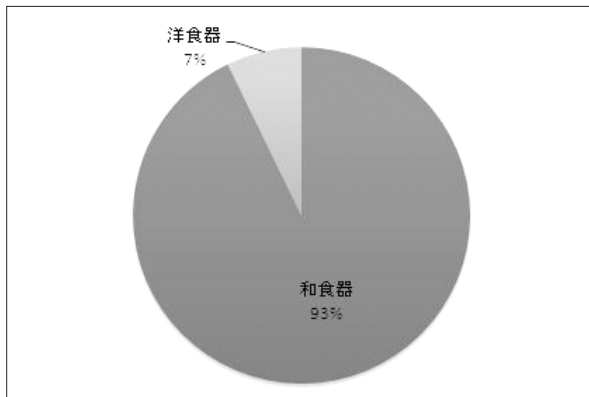


図2 長谷観音堂周辺遺跡の食器構成

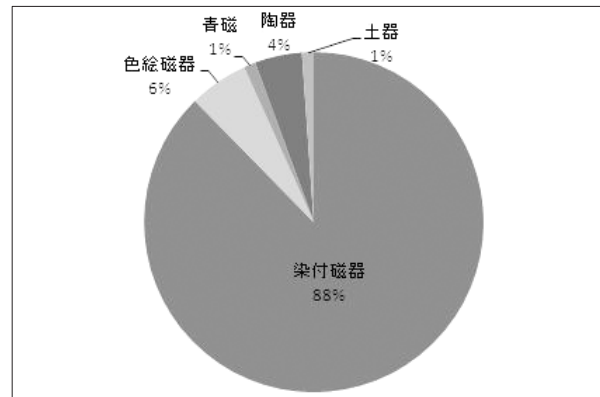


図3 長谷観音堂周辺遺跡の和食器構成

り商品が消費されると述べたうえで、消費のあり方がライフスタイルやアイデンティティーを示す指標になることを指摘している（Lunt and Livingstone 1992）。

これに対し、近代的消費の変遷を歴史的に検討したマクラッケンは、消費財は文化的意味をおびており、その意味が存在するところとして、①文化的に構成された世界、②消費財、③消費者個々人をあげ、「世界からモノへ」、そして「モノから個々人へ」と意味が転移するとしている。また、その意味構造として存在する階級、地位、性別、年齢、職業などの文化カテゴリーは消費財によって実体化され、理念や価値観といった文化原理も消費財によって実体化されると指摘している（マクラッケン 1990）。さらに、マクラッケンはモノの消費のあり方に関して従来議論されてこなかった概念として、消費財の「古光沢（パティナ）」、「キュレイターの消費」、「デイドロ効果」といった概念を提示している。このような消費理論は近代社会の実態を探るうえで示唆的なものであるが、その有効性を具体的な資料を用いて検討する必要がある。

出土した陶磁器にみられる階層差

そこで近代遺跡から発掘された陶磁器にどのように階層差が反映されているか神奈川県内の事例を用いて具体的に検討する。検討資料としたのは前述の神奈川県三浦市ヤキバの塚遺跡（三浦の塚研究会 2003）、江戸時代以来の観光地であり明治以降は別荘地となった神奈川県鎌倉市の長谷観音堂周辺遺跡（宗臺 1995）、そして明治以降別荘地として利用されてきた神奈川県大磯町の神明前遺跡から発掘された大正から昭和初期の資料である。まず、ヤキバの塚遺跡においては、大正から昭和初期の資料は2層から3層にかけて出土した資料（染付磁器）である。磁器を中心に湯呑み碗・飯茶碗・鉢・皿・蓋・急須などが出土している。型紙摺絵・銅版転写による絵付け資料（染付磁器）が多く、色絵磁器が少ないなど安価な陶磁器がほとんどである。また、皿は中皿や小皿が主体で大皿はほとんどみられないこと、洋食器がまったく含まれていないことが特徴である。長谷観音堂周辺遺跡ではゴミ穴として転用された便所穴（土壇3）から大正12年（1923）の関東大震災の後片付けに伴って捨てられた生活財が多量に出土している。出土遺物としては磁器87点（碗・鉢・皿・蓋・香炉・水注・蓮華・玩具・便器）、陶器6点（碗・皿・搗鉢）の他に土製の壺・釜などが出土している。ほとんどが和食器であるがポットや洋皿などの洋食器も若干含まれている（図2）。磁器は手描き・型紙摺絵・銅版転写による絵付け資料（染付磁器）であるが手描きのものが主体を占めており、色絵磁器は少ない（図3）。また、この中には近世に製作された陶磁器も一定量含まれているが、興味深い傾向として近世に製作された食器には大皿や鉢が目立つのに対し、五寸皿・小皿・飯茶碗・湯呑み碗・蓋などは明治中期から大正頃に製作された資料がほとんどであることがあげられる。次に、神明前遺跡は旧佐土原藩島津家の別荘として使用されていた。発掘調査の結果、近現代の面からは多数の土坑、煉瓦を用いた施設、土管を用いた導水施設等の遺構が

表2 近代遺跡出土食器の特徴

遺跡名	所在地	性格	出土食器の特徴				備考
			洋食器	大皿	色絵磁器	高級食器	
ヤキバの塚遺跡	三浦市	村 落	×	×	△	×	海辺の集落
長谷観音堂周辺遺跡	鎌倉市	市街地	△	○	△	×	観光地
神明前遺跡	大磯町	別荘地	○	○	◎	○	旧大名家別荘

検出されている。このうち、第7～11号土坑から和食器として湯呑み碗、飯茶碗、鉢、丼鉢、中・小皿、小杯、土瓶、洋食器としてティーカップ、ソーサー、プレート（皿）など、大正後期から戦中頃にかけて製造された陶磁器製の食器が多数出土している。洋食器の占める割合は全体の約1～2割程度であるが、製造メーカーの裏印のある高級食器（「日本陶器（ノリタケ）」、「東洋陶器」、「日本硬質陶器」、「マイセン」）が多く含まれている。また、和食器についても「日本陶器（ノリタケ）」や「東洋陶器」などの高級食器が全体の約3割程度を占めており、その他の食器についても比較的上質なものが多く、安価な食器は僅かであった。

このように、同じ神奈川県内にあり、大正から昭和初期頃にかけて使用されたと推定される資料でありながら、食器を比較すると海浜村落であるヤキバの塚遺跡、市街地である長谷観音堂周辺遺跡、旧大名家の別荘跡である神明前遺跡では出土した食器の内容に明らかな違いがあることがわかる（表2）。これは経済的格差を前提とした当時の階層の違いを反映していることは明らかであり、食器など日常的に使用あるいは消費された遺物を比較検討していくことが階層差を知る有効な手段であることを示している。このように階層差という観点から近代遺物を研究することは、従来の考古学では言及を避けてきた「高級品」や「廉価品」といった資料の価値について言及することに他ならないが、今後遺物使用者のライフスタイルについて検討するためには経済的価値だけでなく絵柄やデザインなどにみられる使用者の趣味・嗜好についても検討することが必要となってくる。

出土した生活財と居住者のライフスタイル

次に、遺跡から出土した生活財と居住者のライフスタイルの関係を探ることのできる興味深い調査事例として平成13年（2001）から平成14年（2002）にかけて発掘調査が実施された東京都港区上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡の事例を取り上げてみたい（港区教育委員会・株式会社盤古堂2006）。この遺跡からは近世の寺院跡や町屋跡が検出され、それに伴って多くの近世遺物が出土している。また、調査区南東部の台地下段部において大谷石を用いて構築された擁壁に沿って配置された遺構群（253号遺構、252号遺構、152号遺構、154号遺構、245号遺構、284号遺構、125号遺構）から多量の近代遺物が出土している。なかでも出土量の多かった遺構が253号遺構であり、そこからは廃棄された近世の陶磁器・土器、近代の磁器（多量の洋食器を含む）、磁器人形、ガラス瓶（飲料瓶・調味料瓶・食品瓶・化粧瓶・薬品瓶・文具瓶）、ガラス製品（グラス・電灯傘・電球）が出土している（図4）。そして、この遺跡が注目される点は土地の登記簿などから居住者が判明していることである。その居住者とは大正10年（1921）から昭和59年（1984）までこの地に居住していたO家であり、遺構群中からはO家に関連する資料が出土している。調査を担当した山田仁和氏は回収された資料が廃棄された大正末期から戦時中にかけてO家の当主であったO・I氏について調査し（O・I氏については昭和40年に追悼文集が刊行されている）、子孫への聞き取り調査も実施している（山田2006）。

O・I氏は、明治17年（1884）現在の鳥取市に生まれた。明治35年（1902）鳥取県立第一中学校を卒業後、上京して明治学院中等部で英語を学んだ。明治36年（1903）に第五高等学校、明治40年（1907）に東京帝国大学理学部地質学科に入学して、石油地質学を専攻し明治43年に卒業している。明治45年（1912）には石油会社に入社し樺太・台湾・中国などの油田調査を行っている。その後大正3年（1914）



カップ&ソーサー



ティーセット



人形ほか

図4 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡出土の近代遺物

に結婚し、大正5年(1916)長女、大正8年(1919)長男が誕生し、大正10年(1921)にはアメリカ・メキシコ出張、遺跡地である東京芝区へ移転、次女が誕生している。さらに、関東大震災のあった大正12年(1923)に次男が誕生し、大正13年(1924)には中東・ヨーロッパ出張があり三女が誕生している。大正後半から昭和初期にかけて早稲田大学、京都帝国大学、九州帝国大学で講師をつとめ、昭和13年(1938)に日本石油取締役、昭和16年(1941)に帝国石油理事、昭和17年(1942)に帝国石油副総裁に就任し、同年に日本地質学会長に就任したが昭和19年(1944)に自宅で死去している。O・I氏は専門である石油地質学関連の著作を多く残すとともに、野球や学生相撲などスポーツ振興においても活躍した人物であった。その他にも登山や写真を趣味としていたようである。追悼文集によればその性格は剛健実直、健談、親分肌であり自宅に來客が多く、酒肴を供していたという。また、大食漢・甘党であり、鮎・すき焼き・餅が好物であったとされている。昭和初期の自宅の部屋はすべて和式の畳敷きであり、西洋趣味ではないにもかかわらず電気冷蔵庫や映写機、電話、扇風機、天体望遠鏡、ピアノ、アコーデイオン、ライカ製カメラを所有していたという。

こうした居住者情報に対し、253号遺構を中心とした近代遺構から出土した遺物群の特徴にはこれらの情報と一致する部分と一致しない部分がある。このうち、居住者情報と一致する部分としてまずあげられるのが284号遺構から出土した次男の名が手描きされた灰皿の存在である。また、253号遺構から多量に出土した磁器人形(ビスクドール)は3人姉妹の存在やアメリカやヨーロッパへの海外出張との関連を想像させるものである。さらに253号遺構から出土したコダック社の現像液瓶は写真が趣味で現像・焼き付けも行っていたという情報(追悼文集)と一致する。また、食生活では「麻布永坂」の蕎麦つゆ瓶が多量に出土している点は常に來客の多かった家庭の状況を髣髴とさせる。これに対し、居住者

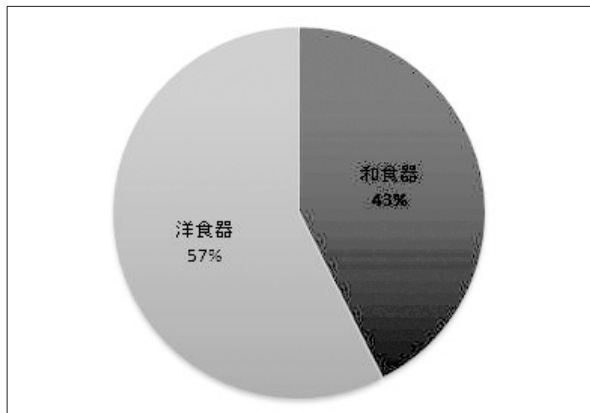


図5 上行寺跡遺跡 253 遺構の食器構成

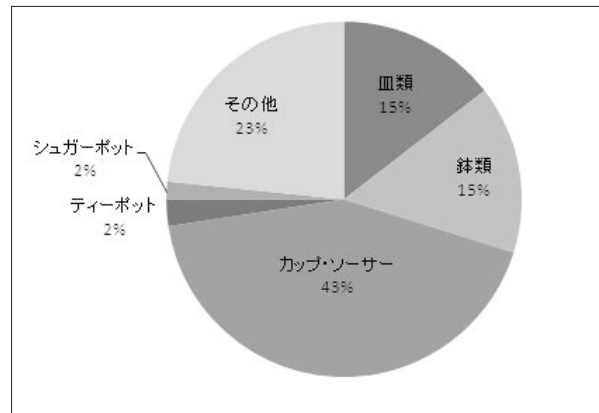


図6 上行寺跡遺跡 253 遺構の洋食器構成

情報と一致しない点もみられる。それは西洋趣味ではないO・I氏の居住地から多量の洋食器が出土している点であり、253号遺構からは和食器を凌ぐ洋食器が出土している（図5）。これについては「海外出張の多さ」や「夫人の趣味」といった説明も可能であるが、洋食器の種類別では皿類の割合が低く、カップ＆ソーサーが多いことから（図6）、山田氏の指摘するように（山田 2006）、これらには来客が多かったO家の中で接客を主とした用途が想定できる。このように、253号遺構を中心に出土した洋食器や洋風の遺物は戦間期の社会的な地位が高く経済的にも余裕のある階層（新中間層）に属する家庭の生活の一端を示している。剛健実直で衣服にも執着せず、当時の自宅の部屋はすべて和式の畳敷きで椅子を用いた生活ではなかったにもかかわらず、電気冷蔵庫や映写機、電話、扇風機、天体望遠鏡、ピアノ、アコーディオン、ライカ製カメラを所有していたライフスタイルの不統一さに対し、山田氏は伝統的な和風の暮らしに進出してきた洋風の文物や生活様式の混在状況は「和洋二重生活」（和歌森 1980）とも呼ばれ、統一感がなく不経済であるとの批判を当時から受けていたことを指摘している（山田 2006）。また、上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡の調査事例はこのような戦間期における新中間層家庭の「文化生活」の受容実態を鮮明にあらわしているとも山田氏は述べている。いずれにしろ、このような近代において消費された生活財と居住者のライフスタイルとの関係を探る試みは緒についたばかりである。今後とも居住者に関する徹底した調査を実施することによって人とモノ（物質資料）の関係を探る試みを実践してゆく必要がある。

おわりに

商品経済が発達した消費社会である近代生活の研究にとって重要な研究課題としてあげられるのはモノの消費をめぐる様々な問題である。また、近代の消費活動の実態を探るためにはモノの使用価値や交換価値を重視する従来の考え方では対応できない側面も多々ある。しかし、そのような近代における消費活動に関する理論を展開するためには、特定の個人や集団が実際にモノをどのように選択し消費していったかを具体的な資料を用いて明らかにしてゆく必要があり、それがモノと人との関係を探る起点となる。そのためには従来のようなモノの機能や製作技術といった側面だけでなく、近代ならではのモノの消費のあり方を考慮した新たな視点から資料を観察してゆくことが要求される。その結果、使用者の階層や経済状況、さらにはライフスタイルという興味ある問題について検討することが可能になってくる。民俗学・文化人類学・考古学など多くの分野で実践されているモノ研究は、日本の近代生活の実態を探るうえで重要な役割を担っているのである。

参考文献

- 旧国立療養所中野病院跡地遺跡調査会 1999『江古田遺跡Ⅰ』
- 倉石忠彦 1990『都市民俗論序説』雄山閣
- 栗田靖之 1977「物質文化から見た現代家庭」『国立民族学博物館研究報告』2巻4号
- 栗田靖之 1978「生活財から見たライフ・スタイル研究」日本生活学会編『住生活と地域社会』ドメス出版
- 小泉和子 1995『室内と家具の歴史』中央公論社
- 今和次郎・吉田謙吉 1930『モデルノロヂオ 考現学』春陽堂
- 相模原市立博物館 1997『上九沢・笹野家とその生活用具』
- 桜井準也 2004『モノが語る日本の近現代生活—近現代考古学のすすめ—』慶應義塾大学出版会
- 桜井準也 2005「近代食器の使用痕分析—食事における動作と作法の復元に向けて—」三田史学会『史学』第73巻4号
- 桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
- 桜井準也 2007「近現代遺物研究と消費理論」鈴木公雄ゼミナール編『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会
- 桜井準也 2007「近現代考古学の諸問題」『季刊考古学』第100号
- 汐留地区遺跡調査会 1996『汐留遺跡』
- 宗臺秀明 1995「長谷観音堂周辺遺跡」『平成6年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- ダグラス, M. and イシャーウッド, B. 1984『儀礼としての消費』新曜社
- 津田良樹 2003「明治・大正期における農村の住環境について—神奈川縣農会における村是調査書等を中心に—」神奈川大学日本経済史研究会編『日本地域社会の歴史と民俗』雄山閣
- 東京都埋蔵文化財センター 1997『汐留遺跡Ⅰ—旧汐留貨物駅跡地内の調査—』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000『汐留遺跡Ⅱ—旧汐留貨物駅跡地内の調査—』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003『汐留遺跡Ⅲ—旧汐留貨物駅跡地内の調査—』
- 葉山町No.2 遺跡発掘調査団 1999『葉山町No.2 遺跡発掘調査報告書』
- 日野市遺跡調査会 2003『南広間地遺跡』
- ブルデュー, P. 1990『ディスタンクシオン』藤原書店
- マクラッケン, G. 1990『文化と消費とシンボルと』勁草書房
- 真島俊一 1986「住まいと道具—佐渡の生活変遷の推定」中鉢正美編『生活学の方法』ドメス出版
- 三浦の塚研究会 2003『漁村の考古学 三浦半島における近現代貝塚調査の概要』
- 港区教育委員会・株式会社盤古堂 2006『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』
- 目黒区大橋遺跡調査会 1998『大橋遺跡』
- メタ・アーケオロジー研究会 2005『近現代考古学の射程—今なぜ近現代を語るのか—』六一書房
- 和歌森太郎 1980「洋風生活の普及」『日本生活文化史 第9巻』河出書房新社
- 山田仁和 2006「第253号遺構及び周辺の近代遺物出土遺構について」港区教育委員会・株式会社盤古堂『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』
- Lunt, P.K. and Livingstone, S.M. 1992 *Mass Consumption and Personal Identity: Everyday economic experience*. Open University Press